

「法物承継システム」でご本尊

滋賀・善楽寺 火災から復興し落慶法要

4年前に火災で本堂などを焼失した滋賀県米原市の善楽寺(田中真英住職)がこのほど本堂を再建し、5月27日には本堂落慶法要と住職継職法要を営んだ。真新しい本堂の内陣には、宗派の「一般寺院法物等承継システム」を通じて、解散した島根県大田市・照善寺のご本尊や親鸞聖人御影などを迎え、門信徒・寺族は再出発の喜びとともに、み教えに生きる尊さをあらためてかみしめた。

同寺は2014年5月、火災で本堂や庫裏、書院など。門信徒が深い悲嘆を覚えた。原因不明の火など建物5棟を失った。田中住職(50、当時は衆徒)は任職だった父・哲心さんを支えながら、「お寺は心の落ち着きどころ。なんとしても再建したい」と、かろうじて焼失を逃れた建物の居間や地域の集会所で法座などを営みながら寺院活動を続けた。

田中住職は「日曜学校に通う孫を連れ、女性がお寺にない寂しさや、更地になった本堂の跡地で毎日草取りをしてくださったご門徒の姿に背中を押していただいた。これまで当たり前前にあったものを失って、お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

再建への歩みの中で、ご本尊は、解散した一般寺院のご本尊などを被災寺院や新設寺院に取り次ぐ宗派の「一般寺院法物等承継システム」を通じて、島根

を重ね、田中住職が「お寺はみんなのもの。皆さんがお参りできる本堂を」と熱心に呼びかけ、次第に全員が丸となった。火災から1年後の15年6月に本堂再建委員会を発足させ、翌年5月には起工式を行った。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

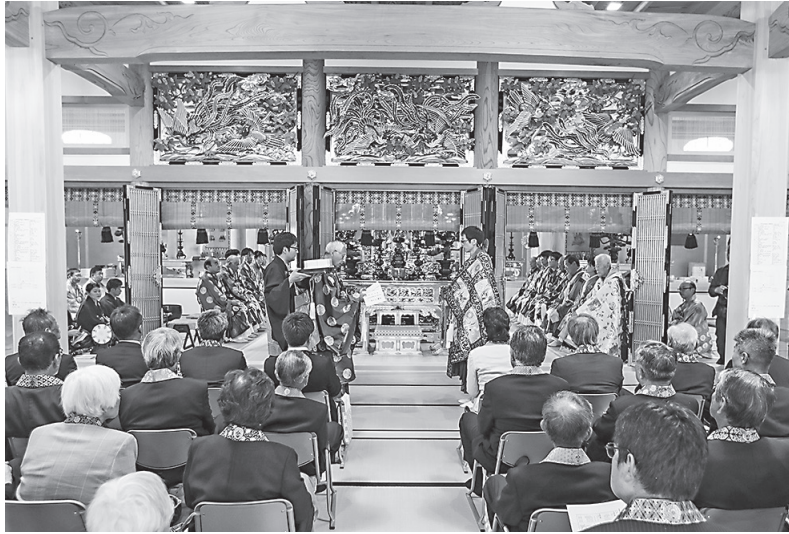
田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。



声も上がったが話し合

の照善寺(平成28年3

月に解散)に安置され、昨年5月に本山で承継した。その秋には竣工したばかりの善楽寺本堂で入仏式が営まれたが、その時に阿弥陀如来像を抱えて内陣まで進んだという門徒総代の田中清さん(77)は「うれしさのあまり、お木像をお抱きしている間、少しも重たいと感じなかった。私たちは本當に大変な経験をしたが、その分、『自分たちのお寺』『ご本尊さまを大切に守り出した』という気持ちが一層強くなった」と話す。

田中住職は「お寺の大切さ、支えの大きさをあらためて感じた」と話す。

一般寺院法物等承継システム 存続が困難となり解散した一般寺院のご本尊や御影などの法物を、宗派がいったん預かり、災害に遭った新たなに設立されたりする寺院に無償で取り次ぐ宗派の制度。親鸞聖人750回大遠忌長期振興計画の一環として2007年11月に設けられ、本山・寺院活動支援部(一般寺院担当)が窓口となっている。問い合わせは同担当まで075(371)5181。